

# しらおか歴史物知りシート

No.1-2

こもれびの森・歴史資料展示室

## 【縄文人のジュエリー・ボックスをのぞいてみたら!?!】

縄文時代の人々は、ピアスやペンダントをはじめ、かんざしや指輪、腕輪など様々な装飾品を持っていたことが知られています。それらの素材も様々で、石、土、漆、骨、角、牙、貝殻などがあげられます。また、デザインや色使いも目を見張るような実に素晴らしいものがあり、技術面でも高度な加工技術を持っていたことがわかってきました。

市内でも、ヒスイ製の曲玉(注)や骨製の管玉、土製のピアスなどが見つかっています。

装飾品の色使いでは、ヒスイの碧を筆頭に、ベンガラ(酸化第二鉄)を使った赤色顔料や、漆に煤を混ぜた黒などが好んで使われているほか、骨の白を意識した白色のメノウの管玉なども知られています。

注 古墳時代の勾玉と区別する意味で縄文時代のを「曲玉」としました。

市内の遺跡では、縄文時代前期初頭(約6,000年前)のタタラ山遺跡から、50点に上る石製のイヤリングやペンダントが出土しています。この時期のひとつの遺跡から見つかった石製装飾品の数としては群を抜いています。しかも、鳥をかたどったものでは、翼をあらわす線刻や腹部の羽毛を表現した刻みなど、実に写実的です。また、動物をあらわしたと思われるものでは、紐通しの穴を側面に開け、ペンダントの向きがねじれないように工夫されており、高い技術がうかがわれます。

イヤリングは、玦状耳飾と呼ばれるもので、環の一方に切り込みを入れてあり、あらかじめ耳たぶに開けた孔を通して装着します。

これらの装飾品の材料となる石の多くは、白岡で産出するものではなく、交易などによって遠くからもたらされたものと思われる。石材の貴重さを象徴する例として、破損したイヤリングに孔を開け、ペンダントに再生した事例がいくつも確認されています。

石材入手の難しい地域では、土製の玦状耳飾が作られていたことも知られています。

これらの装飾品は、単にオシャレ目的で身につけられたものではなく、魔よけやまじない、集団内での役割や出自の象徴などとしての意味があったものと考えられています。もちろん性別なども関係なかったのでしょう。



タタラ山遺跡出土石製装飾品群(市指定文化財)



鳥をかたどるペンダント



側面に孔を開けたペンダント



透かし彫りの耳飾



上段：土製装飾品 中段：石製曲玉 下段：石製丸玉

縄文時代も後期から晩期になると、曲玉状のペンダントや精緻な透かし彫りを施した土製のイヤリングが流行します。

縄文時代の曲玉状のペンダントは、古墳時代のものと異なり、装飾性が高く頭部に瘤を持つものや隆起帯を持つものなどが目立ちます。また、丸玉と組み合わせて使用されていたことがうかがわれます。土製のものは、当時はおそらく赤や黒などに彩色されたり線画が描かれたりしていた可能性があります。

透かし彫りのイヤリングは、直径が1 cmを下回る小型のものから、装飾部の外形が10 cmを上回る大型のものまで、様々な大きさのものがあり、成長に合わせて大きさを変えていたことがわかります。

また、きわめて装飾性の高い彫刻に加え、赤色塗彩されている例が目立ちます。赤い色は、漆塗りのかんざしに用いられる例や、墓穴の中が真っ赤になるほどの顔料が残っている例などもあり、魔よけやまじないなどの意味合いがあった可能性もあります。ペンダント等の石製装飾品にヒスイなど緑色の石が多用されることから、色に対する何らかの意識が働いていたことが想像されます。

このほか、動物の骨や歯（牙）などを装飾品に加工した事例もあります。

展示資料にある、清左衛門遺跡の事例は、哺乳類の四肢骨製の管玉とイヌの犬歯に穿孔したペンダントです。管玉を骨で作ることは、古くから行われていたものと思われ、宇都宮市根古谷台遺跡（縄文時代前期）では、両端の膨れた白色の石製管玉が2点出土しており、中手骨などの両端の関節部分を切除した骨製の管玉を石で模したものと考えられます。市内でもタタラ山遺跡の管玉の中には白色の石材を使用する事例が見られ、骨製の管玉が白色であったことに由来するものと思われま



骨製管玉とイヌの犬歯製ペンダント

骨角製の装飾品は、酸性の強い日本の土壌の中では、きわめて残りにくいため、石製や土製のものが現象的に多く残されているように見えますが、もともとは、貝殻などを含む骨角製あるいは木製など有機質製の装飾品も多数あった可能性があると考えられます。